28『広くてすてきな宇宙じゃないか』成井豊

○ジャンル／ＳＦ
○ストーリー／アンドロイドの民間利用が始まった時代。母親を亡くした柿本家に、アンドロイドのおばあちゃんがやってきた。料理から宿題の手伝いまで、なんでも完璧にこなすおばあちゃんに、長女のスギエと長男のカシオはビックリ。しかし、末娘のクリコだけは、おばあちゃんと口をきこうとしなかった。そして、１カ月後、おばあちゃんを家から追い出すために、クリコはある決意をする……。
○出演者／男４＋女７＝計 11
○上演時間／６０分

登場人物

おばあちゃん
クリコ（柿本の次女）
カシオ（柿本の長男）
スギエ（柿本の長女）
柿本（ニュースキャスター）
サイゴウ（ニュースキャスター）
オオクボ（レポーター）
カツラ（クリコの同級生）
ヨシダ先生（クリコの担任）
サカモト（ＦＲＳ職員）
ヒジカタ（ＦＲＳ職員）

明るくなると、一組の男女が並んで立っている。

二人　こんばんわ。
柿本　ニュース・プラネットの時間です。
サイゴウ　政治経済、科学に教育、国際問題からご近所の噂話まで、ホットな話題を冷めないうちにお届けします。
柿本　司会は私、柿本光介と――――
サイゴウ　サイゴウタカコです。
柿本　最後まで、ごゆっくりお楽しみください。

二人が頭を下げる。

サイゴウ　まず最初は、昨年末より話題になっておりますＦＲＳが、いよいよ明日午前九時より営業を開始する、というニュースから。
柿本　この番組でも何度かレポートしましたので、覚えていらっしゃる方も多いかと思いますが、ＦＲＳというのは厚労省の外郭団体で、一般のご家庭にアンドロイドを貸し出す機関なんですね。
サイゴウ　ＦＲＳは、ファミリー・レンタル・サービスの略ですね。

柿本　日米共同開発で、アンドロイドの第一号が誕生してから、今年で十五年になりますが、実際にアンドロイドに会ったという方は、あまりいらっしゃらないでしょう。アンドロイドの使用は、政府関係の医療施設や福祉施設でしか認められていませんからね。

サイゴウ　見た目は私たちと全く同じですから、何度も会って話までしたのに、全然気がつかなかったという方もいるようです。

柿本　もともとアンドロイドは、近年、人手不足が問題となっている老人福祉の、新しい担い手として研究開発が進められてきました。その成果を、今度は児童福祉へも振り向けようというのが、ＦＲＳなんです。

サイゴウ　ＦＲＳはその名の通り、家族を貸し出す機関というわけです。

柿本　とは言っても、どんな人でも自由に借りられる、というわけではありません。ＦＲＳの審査に合格して、初めて借りることができるんです。

サイゴウ　アンドロイドを悪用されたら困りますからね。

柿本　詳しい話は、実際にＦＲＳの方に聞いてみた方が早いでしょう。

サイゴウ　今、レポーターのオオクボさんが、そちらに行ってるんです。オオクボさん！

別の場所に、オオクボとサカモトが現れる。

オオクボ　はい、私が今来ていますのは、青山にあります、ＦＲＳの東京センターです。お隣にいらっしゃるのが、広報担当のサカモトさんです。

サカモト　よろしくお願いします。

オオクボ　さて、サカモトさん。今回貸し出されるアンドロイドは、七十歳前後の女

サカモト　性タイプということですが。
オオクボ　僕らは、おばあちゃんて呼んでます。
サカモト　どうしておばあちゃんなんですか？　児童福祉という目的からすれば、母親の方が適当でしょう？
オオクボ　アンドロイドは母親にはなれません。機械には子供が産めませんからね。
サカモト　しかし、おばあちゃんにはなれるかもしれない。
オオクボ　機械は人間にはなれませんよ。
サカモト　しかし、機械にできて、人間にできないこともあるでしょう。ＦＲＳのおばあちゃんは何でも知っています。物理だったら、てこの原理から超ひも理論まで、あらゆる法則が小学生にもわかるように説明できます。
オオクボ　てこの原理なら、私だって。
サカモト　お料理だったら、肉ジャガからサーロインステーキまで、ざっと一万種類のメニューが作れます。
オオクボ　私はカレーしか作れません。
サカモト　さらに、ＦＲＳのおばあちゃんは、一度聞いたことを絶対に忘れません。三人の子供がいっぺんに叫んでも大丈夫。三人の言葉を、すべて聞き分けることができます。そして、何より大切なのは、三人の子供を平等に愛すること。
サイゴウ　機械が人間を？
サカモト　おばあちゃんが子供を思う気持ちは、時として母親を超えるんです。
サイゴウ　気持ちがあれば、の話ですけどね。
サカモト　あったらどうします？
サイゴウ　坊主になります。

柿本　サカモトさん、おばあちゃんを借りるには、ＦＲＳの審査に合格しなければならないんですよね？
サカモト　本当に必要かどうか、確かめなくちゃいけないんで。
柿本　たとえば、僕の家はどうでしょうか。
サカモト　失礼ですが、奥さんは？
柿本　一年前に亡くなりました。
サカモト　お子さんは？
柿本　三人います。一番上が今年中三になる女の子、次が中二の男の子、末っ子は女の子で小六です。
サカモト　他にご家族は？
柿本　いません。だから、家の仕事は全部、長女がやってくれています。でも、来年は高校受験なんで。
サイゴウ　手っ取り早く、再婚したらどうですか？
柿本　誰と。
サイゴウ　機械よりは人間の方がマシでしょう？
オオクボ　お父さんの再婚を喜ばない子供もいますからね。
柿本　（サカモトに）どうでしょう。僕の家にもおばあちゃんは来てくれるでしょうか。
サカモト　明日、こちらへお越しください。お話によっては、一人目のおばあちゃんがお伺いすることになるかもしれません。
柿本　ありがとうございます。
サイゴウ　本気ですか、柿本さん？
柿本　（正面に向かって）スギエ、カシオ、クリコ。明日は学校が終わったら、

真っ直ぐ家に帰って来るんだ。おばあちゃんを迎えるために。

カシオがやってくる。

カシオ　何気なく見上げた空が、あまりに広くて胸がつまった、そんなことが何度かある。一度目は、中学の入学式の日。母さんが死んだ日だ。病院の屋上から見上げた空は、海よりも青かった。海には底があるけど、この空には果てがない。そう思うと、淋しくてたまらなくなった。地球が太陽の周りを回っているなら、春の次には夏が来るはずだ。それなのに、僕の家には夏が来なかった。かわりにやってきたのは、静かで冷たい冬だった。たとえば、誰かの誕生日、どんなにはしゃいで大騒ぎしても、バースデイケーキのろうそくを吹き消した瞬間、思わずためいきが出てしまう。しかも、暗闇の中から聞こえてくるのは、僕のためいきだけじゃない。四人分のためいきなんだ。だから、父さんは、あんな決心をしたんだと思う。一年続いた冬のある日、おばあちゃんはやってきた。僕らの冬を終わらせるために。

そこへ、スギエがやってくる。

スギエ　カシオ、そろそろ時間よ。

カシオ　おばあちゃんがやって来て、今日でちょうど四年になる。クリコも今年か

ら高校生だ。おばあちゃんの仕事は、これですべて完了したのだ。

そこへ、クリコがやってくる。

クリコ　お兄ちゃん。早くしないと、おばあちゃん、行っちゃうよ。
カシオ　おばあちゃんが行ってしまう。でも、引き止めるわけにはいかない。次の家の子供たちが、おばあちゃんの来るのを、楽しみに待っているんだから。
スギエ　カシオ、あんた、おばあちゃんを見送らないつもり？
カシオ　姉さん覚えてる、四年前のあの日。父さんがテレビで、おばあちゃんを借りるぞって宣言した夜を。
スギエ　忘れるわけないでしょう？
カシオ　クリコなんか、カンカンに怒っちゃってさ。
クリコ　だって、一人で勝手に決めるんだもん。
スギエ　お父さんに断固抗議するんだって、十二時過ぎまで、帰りを待ってたのよね。
カシオ　何も知らない父さんは、すっかりご機嫌で、お酒まで飲んでるみたいだった。

そこへ、柿本が歌いながらやってくる。

柿本　ただいま。と言っても、こんな時間じゃ、みんな寝てるよな。
スギエ　お帰りなさい。
柿本　お帰りなさい、か。その声はスギエだな。スギエはいい子だな。寝てても、

クリコ　父さんの帰りはちゃんとわかるんだから。でも、女の子の寝言はよくないな。お嫁に行くまでには、直しておかないと。

柿本　何ブツブツ言ってんのよ。

カシオ　その声はクリコか。クリコまで寝言を言うのか。遺伝かな。でも、母さんにはそんな癖なかったぞ。ということは、父さんか？　そう言えば、朝起きると、喉が嗄れてることがある。ニュースを読んでる夢を見ると、必ずだ。あれは全部、寝言になってたのか。

柿本　父さんのは寝言でも、僕らのは寝言じゃないよ。

スギエ　いや、寝言に決まってる。もう十二時をとっくに過ぎているんだ。うちの子が起きてるわけない。試験前以外は十二時までに寝るって、約束してあるんだから。

柿本　お父さん。私たちがこんな時間まで起きてたのは、お父さんに話があるからなのよ。

クリコ　話なら、明日の朝にすればいいじゃないか。

カシオ　話をしなくちゃ、眠る気になんかなれないの。

柿本　僕たちみんな怒ってるんだよ。

三人　父さんのことを？

柿本　そう。

三人　そう。

柿本　もしかして、おばあちゃんを借りるって、一人で勝手に決めちゃったから？

三人　そう。

柿本　ごめん！　父さんが悪かった！　あの後、すごく反省したんだよ。父さんは、去年の暮れにＦＲＳができるって聞いてから、ずっと迷ってたんだ。そのくせ、おまえたちには一言も相談しなかったもんな。でも、サカモト

さんの話を聞いて、やっぱり借りた方がいいって決心したんだ。みんな、おまえたちのためを思ってしたことなんだ。明日は朝一番で、ＦＲＳに行ってくる。だから、今日は早く寝なくちゃ。おやすみ。

クリコ　結局、私たちの意見は聞かないつもり？

柿本　こんな時間まで起きてたんだ。どうせ反対なんだろう？

クリコ　いつもみたいに多数決を採ってよ。民主的な家庭にしようって言ったのはお父さんでしょう？

柿本　クリコはすごいな。小学生のくせに、民主的なんて言葉知ってるんだ。だったら、大統領は議会に対して拒否権が使えることも知ってるんだな？

カシオ　選挙もしてないのに、いつから大統領になったの？

スギエ　お父さん。私たちは、お父さんが一人で勝手に決めたってことを怒ってるんじゃないの。ＦＲＳの人が言ってたでしょう？　おばあちゃんを本当に必要としている家にしか貸すことはできないって。

（柿本に）家には必要ないじゃない。

クリコ　（クリコを制して）お父さんは私の受験のことを心配してくれてるんだろうけど、勉強なんて、授業をしっかり聞いてれば充分なのよ。私の成績、家の仕事をするようになってから下がった？

スギエ　下がるどころか、ぐんぐん上がった。

柿本　このまま行けば、志望校には楽に入れるって、先生にも言われたのよ。父さんも言われたよ。中学生とは思えない、しっかりした娘さんですねって。自分の子供を褒められて、うれしくない親がいるもんか。でも、うれしい気持ちの片隅に、ちょっぴり苦い気持ちもあるんだ。

カシオ　苦い気持ちって？

柿本　スギエはとっても頑張ってる。カシオだって遅刻をしなくなったし、クリコだってトマトが食べられるようになった。この一年間、本当によく頑張ってきた。でも、やっぱりまだ子供なんだから、たまには誰かに甘えたり、わがままを言ってもいいはずだ。

クリコ　機械にどうやって甘えるのよ。

柿本　機械だと思うからいけないんだ。

クリコ　でも、人間じゃないでしょう？

柿本　クリコは大好きなぬいぐるみを、友達みたいにしてかわいがってるだろう。自分が人間だと思えば、どんなものにだって魂は宿るんだ。

クリコ　友達はほしいけど、おばあちゃんなんかいらないの。

柿本　子供には母親が必要なんだよ。クリコはまだ小学生じゃないか。でも、父さんは再婚するつもりはない。おまえたちの母さんはたった一人だ。だから、おばあちゃんなんだよ。

カシオ　……姉さんの家庭教師もやってくれるんじゃないかな。

スギエ　家庭教師ならカシオでしょう？　理科以外はみんな赤点じゃない。

柿本　クリコにだって、知りたいことを何でも教えてくれるよ。

クリコ　私は自分で調べるからいい。

クリコが走り去る。

柿本　クリコ！　（スギエとカシオを振り返って）実際に会えば、すぐに仲良くなるさ。さあ、もう寝よう。明日は早起きしなくちゃな。おやすみ。

スギエ　おやすみなさい。

柿本とスギエが去る。

カシオ　僕はもともと賛成だった。アンドロイドには興味があったし、姉さんやクリコのことを考えれば、やっぱりおばあちゃんは必要だったんだ。クリコがいらないって言い張れば言い張るだけ、父さんの言った苦い気持ちが、僕の胸の中に広がった。そういう僕も、冬の寒さにはすっかり参っていた。おばあちゃんが来れば、何かが変わるかもしれない。そんな期待もちょっぴりあった。でも、まさかあそこまで変わってしまうなんて……。次の日の夕方、僕たちの家に、春一番が吹いた。

チャイムの音。スギエ・クリコが飛び出す。

クリコ　来た来た来た！
カシオ　あれ？　父さんは一緒じゃないのかな？
スギエ　もうすぐニュースの時間でしょう？　きっとおばあちゃん一人で来たのよ。
カシオ　姉さん、出てよ。
スギエ　何言ってるの。こういう時は、家族みんなでお出迎えするのよ。
クリコ　私、宿題やらなくちゃ。
スギエ　クリコ、ずるいわよ。

クリコが走り去る。チャイムの音。

カシオ　そう言えば、僕も宿題があったんだ。
スギエ　学校の勉強は家庭に持ち込まない主義じゃなかったの？
カシオ　理科の宿題なんだよ。星座の観察。
スギエ　そんなの、寝る前にやればいいじゃない。カシオ！

カシオが走り去る。チャイムの音。

スギエ　はい、今、行きます！　……長女って損だ。イヤなことはみんな私に押しつけるんだから。

スギエがドアを開ける。誰もいない。

スギエ　あれ？（見回して）あれ？

スギエが去る。カシオがやってくる。天体望遠鏡を持っている。

カシオ　あれ？　今日は結構星が出てるな。でも、東京から見えるのは、三等星か四等星までなんだよね。やっぱり百科事典を写しちゃおうかな。（望遠鏡を覗く）

そこへ、おばあちゃんがやってくる。日傘を差して、トランクを持っている。

おばあちゃん　見えない星まで書いちゃっていいの？

カシオ　僕の視力は一〇・〇ですって、言うからいい。

おばあちゃん　あら、私の視力と同じじゃない。

カシオ　嘘だね。

おばあちゃん　嘘じゃないわよ。私には本当のことしか言えないの。

カシオ　あのね、一〇・〇の人間なんてマサイ族にしかいないんだよ。（おばあちゃんを見る）

おばあちゃん　それじゃ、あんた、マサイ族？
カシオ　……どこから入ったの？
おばあちゃん　何回チャイムを鳴らしても、開けてくれないんだもん。それより、あんた、カシオくんでしょう？
カシオ　（頷く）
おばあちゃん　今やってるのは、理科の宿題？
カシオ　（頷く）
おばあちゃん　理科は嫌い？
カシオ　（首を横に振る）
おばあちゃん　好きなの？
カシオ　（頷く）
おばあちゃん　だったら、まじめにやらなくちゃ。ほらほら、望遠鏡を覗いて。ミザールはどの星かわかる？
カシオ　ミザール？　北斗七星の一つだよね？
おばあちゃん　知ってるんじゃない。
カシオ　全部名前を覚えたんだ。ドーブヒ、メラク、フェクダ、メグレズ、アリオト、ミザール、ベネトナーシュ。
おばあちゃん　そうそう、ミザールは六番目の星。ということは？
カシオ　上から数えるのか、下から数えるのか、わからない。
おばあちゃん　あんた、本当に理科が好きなの？
カシオ　好きだよ。この望遠鏡だって僕のだし。
おばあちゃん　でも、あんまり使ってないみたいじゃない。
カシオ　いちいち覗いて見るより、本で調べた方が早いから。

おばあちゃん　ガリレオは本なんかで調べなかったのよ。七つの星をよく見て。二重星になってる星が一つだけあるでしょう。

カシオ　二重星？

おばあちゃん　アラビアでは昔、兵隊の視力検査でミザールを使ったんだって。普通の視力がある人なら、ミザールのすぐそばにもう一つ、アルコルって小さな星が見えるはずなの。目が悪い人は、この二つが一つに見えるわけ。ほら、望遠鏡なんか使わないで、自分の目で見る。

カシオ　わかった。ひしゃくの方から数えるんだ。

おばあちゃん　アルコルが見える？

カシオ　見える見える。ちゃんと二つに分かれてる。

おばあちゃん　今にもくっつきそうに見えるけど、本当は〇・〇三光年も離れてるのよ。私の目から見ると、ミザールとアルコルの間に、もう一つ星が見えるの。

カシオ　……やっぱりアンドロイドなんだ。

おばあちゃん　あれ？　まだ言ってなかったっけ？　私、今日からこちらでお世話になります――

カシオ　姉さん！　クリコ！

おばあちゃん　なんだ、みんないるの？　いるなら、どうしてドアを開けてくれなかったの？

そこへ、スギエとクリコがやってくる。

スギエ　カシオ、ドアを開けたら誰もいないのよ。（おばあちゃんの顔を見て）カシオじゃない！

おばあちゃん　スギエさんとクリコちゃんね？　よろしく。ところで夕食の支度はもう始まっちゃいました？

スギエ　いいえ、まだこれから……。

おばあちゃん　よかった、間に合った。（トランクからエプロンを取り出して）今夜はとびっきりのご馳走を作りますからね。なんてったって、私の初仕事なんだし。もちろん、みんなも手伝ってくれるでしょう？　スギエさんは買い出しをお願いね。すぐにリストを作るから。カシオくんとクリコちゃんはお部屋の飾り付けをよろしく。

クリコ　飾り付け？

おばあちゃん　だって、今夜はパーティだもの。

スギエ　パーティって、何の？

おばあちゃん　決まってるでしょう？　私の歓迎パーティよ。

柿本とサイゴウが現れる。

サイゴウ　続いてのニュースは、昨日もお伝えしましたＦＲＳについて。
柿本　さて、待ちに待ったＦＲＳの営業が、本日午前九時より開始しました。青山のセンターには、予想をはるかに上回る応募者がつめかけ、一時はパニック状態になったようです。
サイゴウ　アンドロイドを借りる最初の人間になりたくて、徹夜した方までいたそうですね。
柿本　そこで今日は、記念すべき第一号を借りることになったご家庭をレポートすることにしました。
サイゴウ　今、レポーターのオオクボさんが、そちらのお宅に行ってるんです。オオクボさん！

別の場所に、オオクボが現れる。

オオクボ　はい、私が今来ていますのは、杉並区にあります、柿本さんのお宅です。
柿本　第一号は僕だったんですね。
オオクボ　早速中に入って、おばあちゃんの仕事ぶりを拝見することにしましょう。

そこへ、おばあちゃんが飛び出す。

おばあちゃん　ちょうどよかった。あなたも椅子を運ぶの、手伝ってください。

オオクボ　この騒ぎは何でしょう。部屋の模様替えでもしてるんでしょうか。

そこへ、カシオが飛び出す。

カシオ　パーティだって。

オオクボ　パーティ？

そこへ、スギエ・クリコが飛び出す。

スギエ　おばあちゃんの歓迎パーティよ。このマイク、いいですか？（マイクを取って）お父さん、まさか、お父さんがやるって言い出したんじゃないでしょうね？

クリコ　また私たちに黙って？

柿本　謹んでお詫び申し上げます。

二人　お父さん！

おばあちゃん　ほら、あんたたち。口は動かさないで、手を動かす。

オオクボ　すみません、あなたがアンドロイドのおばあちゃんですか？

おばあちゃん　私をおばあちゃんて呼んでいいのは、家の子供たちだけよ。

スギエ　おばあちゃん、このお鍋、次は何を入れるの？

カシオ　（同時に）おばあちゃん、このクリスマスツリー、どこに置くの？
おばあちゃん　にんじん。窓の下。
オオクボ　驚きました。二人の言葉を完璧に聞き分けています。まさに完璧なおばあちゃんです。
サイゴウ　何だか性格がきつそうですね。子供たちが心配だわ。
オオクボ　（カシオに）ちょっと君、聞いてもいいかな。おばあちゃんが家に来て、どんな気持ち？
カシオ　忙しくてそれどころじゃない。
クリコ　誰も歓迎してないのに、どうして歓迎パーティなの？
スギエ　相手はアンドロイドなのよ。逆らわないで、言う通りにするの。
オオクボ　（クリコに）やっぱりアンドロイドは恐い？
クリコ　だって、叩かれたら痛いだろうし。
柿本　叩くもんか。アンドロイドには、人間を傷つけることはできないんだ。
サイゴウ　でも、故障して暴れ出したら、誰にも止められないでしょう？
おばあちゃん　（クリコに）ガオーッ！　なんて暴れてほしくなかったら、手を動かすの。
オオクボ　もし子供たちが言うことを聞かなかったら、子供たちを叩きますか？
おばあちゃん　それは親の仕事でしょう？　おばあちゃんの仕事は、叩かれた子供たちを慰めること。
柿本　サカモトさんの言った通りだ。
おばあちゃん　それより、お父さん。仕事が終わったら、真っ直ぐ帰ってきてくださいよ。お酒なんか飲みに行かないで。
柿本　変なこと言わないでくださいよ。全国ネットなんですから。
スギエ　あれ、クリコは？

カシオ　トイレにでも行ったんじゃないの？
柿本　なんだあいつは。またおなかがグルグルピーか？
スギエ　お父さん、全国ネット。
おばあちゃん　たぶん、私と口をききたくないのよ。
柿本　すいません。末っ子で甘やかしたせいか、どうも人見知りが激しくて。
カシオ　クリコだけは、おばあちゃんを借りるのに反対だったんだ。
スギエ　私たちだって、最初は反対したでしょう？
柿本　スギエ、クリコを呼んできなさい。
おばあちゃん　私が行きましょう。とにかく一度は話してみなくちゃ。

おばあちゃんが去る。

スギエ　……おばあちゃんて、誰かに似てるね。
カシオ　誰かって？
スギエ　お母さんによ。
柿本　当たり前だ。母さんの写真を持っていって、こいつが七十歳になった時の顔にしてくださいって頼んだんだから。
スギエ　お母さんはあんなふうにはならないわ。
柿本　当たり前だ。あの人は母さんの代わりじゃない。おばあちゃんなんだから。

カシオ・スギエ・柿本・サイゴウ・オオクボが去る。おばあちゃんがやってくる。

おばあちゃん　クリコちゃん、中にいるんでしょう？　開けてくれない？

そこへ、クリコがやってくる。

おばあちゃん　まだ、ちゃんとお話してなかったでしょう？　クリコちゃんがどんな子か、おばあちゃんに教えてくれない？

クリコ　（去ろうとする）

おばあちゃん　どうしても開けてくれないなら、強行突破するしかないわね。

クリコ　（ドアを支える）

おばあちゃん　でも、そんなことしたら、ますます口をきいてくれなくなっちゃう。ねえクリコちゃん、せめて声だけでも聞かせてくれない？　「おばあちゃんなんかあっちに行っちゃえ」でもいいからさ。

クリコ　（去ろうとする）

おばあちゃん　おばあちゃんはクリコちゃんが好きよ。たとえクリコちゃんが強情っぱりでも、泣き虫でも、淋しがりやでも、分数の割り算がわからなくても、四国にある県の名前が全部言えなくても、クロールが苦手でも、平泳ぎが苦手でも、要するに水泳は全部苦手でも、トマトが嫌いでも、歯医者さんが嫌いでも、おばあちゃんが嫌いでも。

クリコはもういない。

おばあちゃん　おばあちゃんは、クリコちゃんのおばあちゃんなんだから。

カシオがやってくる。

カシオ

春一番が吹いたからと言って、すぐに暖かくなるわけじゃない。だけど、冬の寒さに震えてる暇は、一瞬もなくなったんだ。おばあちゃんは、本当に何でもできる。さすがの姉さんも、おばあちゃんの実力を認めないわけにはいかなかった。僕はすっかり星座に詳しくなった。クリコは……、クリコだけは、おばあちゃんと口をきかなかった。食事の時間以外は、自分の部屋から出てこない。父さんは、そのうち我慢できなくなるさって笑ってたけど、クリコの頑固は父さんの遺伝だ。こうして最初の一カ月は、あっという間に過ぎてしまった。

チャイムの音。クリコとカツラがやってくる。反対側から、ヨシダ先生がやってきて、二人の行く手に立ち塞がる。

カツラ　先生さようなら。
ヨシダ先生　はい、さようなら。（言いながら動かない）
カツラ　先生さようなら。
ヨシダ先生　はい、さようなら。（言いながら動かない）
カツラ　さようならって言ってるのに。
ヨシダ先生　柿本さんは、どうして言わないのかな。
カツラ　クリコちゃんが言わないから、帰らせてくれないんですか？
ヨシダ先生　どうしてかな、柿本さん。
カツラ　クリコちゃん、また何かやったの？
ヨシダ先生　今日の三者面談は、柿本さんの順番じゃなかったかな。
クリコ　そうだ、私、すっかり忘れてた。
ヨシダ先生　へえ、忘れたの。先生はまた、知ってて帰っちゃうのかと思った。
カツラ　先生、今、何て言いました？　知ってて帰っちゃうのかと思った？　先生はクリコちゃんのことを疑ってるんですか？
ヨシダ先生　違うのよ、カツラさん。先生はそんなつもりで言ったんじゃないの。でも

クリコ　ね、柿本さん。三者面談のプリント、ちゃんとお家の人に渡した？
ヨシダ先生　渡しました。
クリコ　お家の誰に？
ヨシダ先生　……家はお母さんがいないし、お父さんは仕事が忙しいから、学校には誰も来られないんです。
クリコ　そう思って、お家の人には見せないで、机の引き出しの中に放り込んだ。どうしてそこまで知ってるんですか？
ヨシダ先生　先生くらいのベテランになると、クラスの子の気持ちは全部わかるの。
カツラ　それじゃ、私の気持ちもわかるんですか？
ヨシダ先生　もちろん。
カツラ　それじゃ、私は今、何を考えてるでしょう？
ヨシダ先生　さあ、柿本さん。教室に戻りましょう。
クリコ　面談するんですか？　家は誰も来られないのに。
ヨシダ先生　一人いるでしょう、来られる人が。
クリコ　……まさか。
ヨシダ先生　柿本さんたら、おばあちゃんがいるって教えてくれないんだもん。先生、今までいろいろ気を遣って損しちゃった。
カツラ　え？　クリコちゃんにはおばあちゃんがいるの？
クリコ　いないよ。
ヨシダ先生　どうして隠すの。あんなにいいおばあちゃんなのに。
クリコ　先生、会ったんですか？
ヨシダ先生　お昼休みに電話があったのよ。三者面談は親じゃなくちゃいけないんですかって。お家の人なら誰でもいいのよ。だから、三時に来てくださいって

カツラ　言っておいた。
ヨシダ先生　もう三時はとっくに過ぎてるよ。ほらほら、おばあちゃんを待たせちゃ悪いでしょう？　一緒に教室に戻りましょう。

クリコが走り去る。

ヨシダ先生　どうしたの、柿本さん！
カツラ　先生、クリコちゃんは反省したんですよ。おばあちゃんを待たせちゃ悪いから、あんなに急いで戻ったんです。ところで、先生、私は今、何を考えてるでしょう？

ヨシダ先生が走り去る。

カツラ　そうです。先生も走った方がいいって考えてたんです。

カツラが走り去る。クリコが飛び出す。周囲を見回す。そこへ、おばあちゃんがやってくる。

おばあちゃん　残念でした。一等賞はおばあちゃんでした。
クリコ　……私の部屋に勝手に入ったでしょう。
おばあちゃん　お掃除をするためにね。でも、一応ノックはしたわよ。
クリコ　私の部屋は私が掃除することになってるの。毎週日曜日に掃除機をかけて、

おばあちゃん　ぞうきんで拭いてるの。
だから、あんなにきれいだったんだ。ただし、ベットの下と机の裏側はホコリがたまってたみたいね。手が届かなかったんだろうけど。
クリコ　ベットの下は大晦日に拭くの。
おばあちゃん　それまでとっておくつもりだったの？　そうと知っていれば、拭かなかったのに。
クリコ　私の机の引き出し、勝手に開けたでしょう！
おばあちゃん　開けたんじゃないのよ。机を持ち上げて床を拭いてたら、引き出しがスルスルって出てきちゃって、ガシャンって。
クリコ　どうして勝手なことばかりするの？
おばあちゃん　私じゃないのよ。引き出しのやつが勝手に――――

そこへ、カツラ・ヨシダ先生が飛び出す。

カツラ　この人がクリコちゃんのおばあちゃん？
クリコ　違うよ。
おばあちゃん　ヨシダ先生ですね？　いつもクリコがお世話になってます。
ヨシダ先生　はじめまして。
クリコ　違うって言ってるでしょう？
ヨシダ先生　どうしたの柿本さん。せっかくおばあちゃんが来てくださったのに。
クリコ　私のおばあちゃんは二人とも、私が生まれる前に死んだの。
カツラ　じゃ、この人は誰？
クリコ　ただのアンドロイドよ。

クリコが走り去る。後を追って、カツラが走り去る。

ヨシダ先生　アンドロイドって、今度貸し出されることになった、機械の？
おばあちゃん　そうです。四月からクリコちゃんのおばあちゃんになりました。

ヨシダ先生がおばあちゃんに右手を差し出す。固い握手。

ヨシダ先生　アンドロイドの方には、家の母が病院でお世話になってるんです。
おばあちゃん　ご病気なんですか？
ヨシダ先生　最近はすっかり元気になりました。アンドロイドの方って、みんな若くてハンサムだから、母ったらいい歳こいて喜んじゃって。
おばあちゃん　あの子はあんまり喜んでくれないんです。
ヨシダ先生　そうみたいですね。あんなに怒った柿本さんを見たの、初めてです。
おばあちゃん　でも、初めて話ができました。話をしなくちゃ、あの子がどんな子か、わかりませんからね。
ヨシダ　いい子ですよ。明るいし、責任感はあるし。ちょっと頑固だけど。
おばあちゃん　あの子が頑固になればなるほど、こっちもファイトが湧いてくるんですよ。

クリコ・カツラがやってくる。

クリコ　すみません。すみません。

そこへ、サカモトがやってくる。

サカモト　あれ？　柿本さんのお嬢さんじゃないですか。今日はどうしました？

クリコ　どうして私のこと、知ってるんですか？

サカモト　この前、お父さんの番組に出てましたよね？　どうですか、おばあちゃんは？　仲良くなれましたか？

クリコ　機械なんかと仲良くなれません。

サカモト　それは、機械だと思うからでしょう。ＦＲＳのおばあちゃんは、どこから見ても人間ですよ。だから、あなたが人間だと思えば――――

クリコ　引き取ってください。

サカモト　……おばあちゃんをですか？

クリコ　家には必要ないんです。必要だと思ってるのは、お父さんだけなんです。

サカモト　ＦＲＳでは必要だと判断したんですが。

クリコ　お父さんの話だけで判断しないでください。

サカモト　確かに、あなたの意見も聞くべきだったかもしれませんね。（奥に向かって）ちょっと、ヒジカタくん。

そこへ、ヒジカタがやってくる。

サカモト　四月十日に、柿本さんと話をしたのは君だよね？　こちらはお嬢さんの――
ヒジカタ　クリコちゃんですか？
サカモト　おばあちゃんを引き取ってほしいって言うんだ。君が話を聞いてくれないかな。
ヒジカタ　わかりました。
サカモト　（クリコに）必要だと判断したのは彼です。あなたの話を聞いて、やっぱり必要ではないと判断したら、おばあちゃんは引き取りましょう。

サカモトが去る。

ヒジカタ　何か気に入らないことでもあったんですか？
クリコ　私の部屋を勝手に掃除したのよ。
カツラ　それくらいのことで怒ってたの？
クリコ　引き出しまで勝手に開けたのよ。プライバシーの侵害よ。
カツラ　他の人に見られたら困るものが入ってたんだ。
クリコ　入ってないけど、手紙だって、ハサミだって、鏡だって、アンドロイドなんかに見られたり、触られたりするのはイヤなの。
ヒジカタ　アンドロイドが機械だからですか？

クリコ　機械のくせに人間のふりをするからよ。
ヒジカタ　ふりなんかしてませんよ。アンドロイドは、自分が機械であることをよく知っています。
クリコ　機械なら機械らしくしてればいいじゃない。家の中をウロウロ歩き回ったり、ああしろこうしろって命令することないじゃない。
ヒジカタ　仕方ないでしょう。それがおばあちゃんの仕事なんだから。
クリコ　突然やってきて、おばあちゃんだって言われたって、はいそうですかって答えられないわよ。
ヒジカタ　最初は誰でもそうですよ。一緒に暮らしているうちに、ホンモノのおばあちゃんみたいな気がしてくるんです。
クリコ　それがイヤなの。
ヒジカタ　ホンモノになることがですか？
クリコ　……私のおばあちゃんは二人とも死んだのよ。死んじゃったけど、ホンモノのおばあちゃんだったのよ。新しいホンモノができたら、死んじゃったホンモノはどうなるの？
ヒジカタ　死んだ人のことより、生きているあなたのことを考えたらどうです。
クリコ　私が生きているのは、二人のおばあちゃんがいたからじゃない。
ヒジカタ　しかし、今のあなたには何もしてくれないでしょう。
クリコ　私が何かしてほしいって言った？
ヒジカタ　言わなくても、お父さんには聞こえたんでしょう。
クリコ　私におばあちゃんが必要だと思うなら、死んじゃったおばあちゃんを生き返らせてよ。
ヒジカタ　それは無理です。

クリコ　わかってるわよ。
ヒジカタ　ニセモノだって、あなたを思う気持ちは、誰にも負けませんよ。
クリコ　イヤなものはイヤなの。
ヒジカタ　……わかりました。
クリコ　それじゃ、あの人を引き取ってくれるの？
ヒジカタ　あなたの話を聞いて、ますます確信しました。あなたにはおばあちゃんが必要です。
クリコ　全然わかってないじゃない。
ヒジカタ　いいえ、あなたがおばあちゃんをイヤがる気持ちはわかりました。しかし、ＦＲＳとしては、おばあちゃんを引き取るわけにはいきません。だから、僕が何とかしましょう。
カツラ　何とかするって？
ヒジカタ　おばあちゃんを壊すんです。
クリコ　そんなことできるの？
ヒジカタ　アンドロイドは何で動くか、知っていますか？
クリコ　機械だから、電気でしょう？
カツラ　背中をパカッと開けて、電池を交換するわけ？
ヒジカタ　交換するのは大変だから、充電するんです。毎月十日にＦＲＳに来て。
クリコ　十日って、今日よね？
ヒジカタ　だから、今、おばあちゃんのバッテリーはほとんど空になっているはずだ。
カツラ　空になったらどうなるの？
ヒジカタ　体の動きがだんだんゆっくりになって、やがて完全に止まります。
カツラ　なんだ。おもちゃと同じか。

ヒジカタ　それが全く違うんです。アンドロイドの電子頭脳は、人間の脳をモデルにして作られています。人間の脳は、一度止まったら二度と動かない。アンドロイドの電子頭脳も、それと同じなんです。

カツラ　じゃ、電気がなくなったら、アンドロイドは死ぬの？

クリコ　（ヒジカタに）でも、電子頭脳を取り替えれば、また動き出すんでしょう？

ヒジカタ　ええ。しかし、今夜の充電を阻止すれば、話は別です。ＦＲＳの電気を止めれば、おばあちゃんは充電できなくなる。おばあちゃんだけじゃなくて、ＦＲＳに所属しているすべてのアンドロイドを壊せるんです。

クリコ　すべてのアンドロイドを？

カツラ　（ヒジカタに）ＦＲＳの人がそんなことしていいの？

ヒジカタ　よくはないけど、他に方法がありません。

カツラ　でも、他の人に見られたら？　警察に逮捕されちゃうよ。

ヒジカタ　そうならないように、うまくやりますよ。しかし、もし逮捕されたら、その時は僕が責任を取ります。（クリコに）選ぶのはあなたです。あなたは本当におばあちゃんがイヤですか？　僕におばあちゃんを壊してほしいですか？

クリコ　（うなずく）

ヒジカタ　じゃ、すぐに行動開始です。僕と一緒に来てください。

柿本・サイゴウが現れる。

サイゴウ　三つ目のニュースは、東京南部の停電に関する続報です。
柿本　本日午後六時頃、品川にあります関東電力の電力ターミナルに何者かが押し入り、施設を破壊して、送電機能を完全に停止させました。
サイゴウ　これによりまして、東京南部一帯が停電になっております。関東電力の発表では、復旧までまだしばらく時間がかかる模様です。
柿本　目撃者の話によりますと、電力ターミナルに押し入ったのは、三十歳前後の男で、胸にＦＲＳの三文字が入ったジャンパーを着ていたそうです。
サイゴウ　ＦＲＳはファミリー・レンタル・サービスの略ですね。
柿本　さらに、この男は、小学生の女の子を二人連れていたそうです。二人は男の後ろについて回って、「いけいけ、やれやれ」と叫んでいたそうです。
サイゴウ　親子で強盗でもしようとしたんでしょうか。しかし、どうしてまた電力ターミナルなんかに。
柿本　詳しい情報が入り次第、またお伝えしたいと思います。それでは次のニュース――――

おばあちゃんがやってくる。

おばあちゃん　おなかが空いた、腹ペコだ。ただいま。

そこへ、スギエがやってくる。

スギエ　お帰りなさい。

おばあちゃん　スギエさん、今日の夕ごはんはあんたが作ってくれる？　私はこれからＦＲＳに行かなくちゃいけないの。月に一度の充電なのよ。

スギエ　あれ？　クリコは一緒じゃないの？

おばあちゃん　先に帰ったのかと思ったけど。

スギエ　お父さんの番組はみんなで見るって決めてるのに。

おばあちゃん　私と顔を合わせたくないのね。

スギエ　学校で何かあったの？

おばあちゃん　またクリコちゃんを怒らせちゃったのよ。私のことは、先生にもお友達にも内緒にしたかったみたい。

スギエ　やっぱり誰にも話してなかったんだ。

おばあちゃん　スギエさんも内緒にしてるの？

スギエ　（首を横に振って）クラスの子があの放送を見てたのよ。次の日、学校に行ったら、アンドロイドに会わせてって、みんなに頼まれた。

おばあちゃん　でも、誰も会いに来ないわね。

スギエ　全部断ったの。あなたは自分のおばあちゃんを見世物にできるのって言って。

おばあちゃん　ありがとう。私なんかのために。

スギエ　おばあちゃんのためじゃないわ。私は私を見世物にしたくなかっただけ。アンドロイドが必要なくらい不幸な家だなんて、思われたくないもの。

おばあちゃん　そんなこと、誰も思わないわよ。

スギエ　だったら、どうしてこの家に来たのよ。この家には自分が必要だって思ったからでしょう？　でも、実際に来てみたらどう？　クリコは前より明るくなった？　なるわけないわ。毎日、おばあちゃんの顔を見るたびに思い出すんだもの。家にはお母さんがいないんだってことを。

おばあちゃん　私の顔が、お母さんに似てるから？

スギエ　性格だってそっくりじゃない。アンドロイドなのに。人間じゃないのに。

おばあちゃん　私がお母さんに似てるのはね、あんたたちにお母さんのことを忘れさせないためよ。

スギエ　そんなの残酷よ。

おばあちゃん　忘れてしまう方が、もっと残酷じゃない。

スギエ　思い出したって、悲しくなるだけじゃない。

おばあちゃん　だから、私がいるのよ。

スギエ　おばあちゃんじゃ代わりにならないの。

おばあちゃん　私は代わりになるために来たんじゃない。この家の真ん中にポッカリ空いたクレーターは、あまりに大きすぎて、誰にも埋められない。クレーターのことを忘れるのは簡単だけど、それじゃ、いつまで経っても向こう側へは渡れない。だから、私はロイター板。

スギエ　ロイター板？

おばあちゃん　跳び箱の手前に置く板よ。この板を強く蹴れば蹴るほど、高く、遠くへ跳べるわけ。どんなに強く蹴ったって、機械だから壊れないのよ。

スギエ　壊れない機械なんてないわ。
おばあちゃん　私は特別。あんたたちを助けるために、壊れるわけにはいかないのよ。だから、安心して蹴ってちょうだい。
スギエ　本当に壊れないの？
おばあちゃん　壊れて暴れ出したらどうしようって思ったんでしょう？　大丈夫よ。電気がなくならない限り、私は不死身なの。

そこへ、カシオが飛び出す。手には携帯電話。

カシオ　姉さん、ニュースを見てた？
スギエ　いけない。今、ちょっと話をしてたから。
カシオ　大変なんだよ。ほら、今ちょうど話してる。

柿本・サイゴウが現れる。

サイゴウ　たった今、レポーターのオオクボさんが、ＦＲＳの東京センターに到着したようです。オオクボさん。

オオクボ・サカモトが現れる。

オオクボ　はい、遅くなって申し訳ありません。東京南部は六時から続く停電で、パニック状態に陥っています。ＪＲ、東京メトロなどの鉄道はすべて運休。そのため、道路はすべて渋滞です。

サイゴウ　ＦＲＳの方から、何か発表はあったんでしょうか。
オオクボ　三十分後に、記者会見が行われることになりました。その前にこちらのサカモトさんが、どうしても話をしたいとおっしゃるので。
サカモト　僕は柿本さんと話がしたいんです。
柿本　僕と？
サカモト　品川の電力ターミナルを襲撃したのは、確かにＦＲＳの職員です。名前はヒジカタ。一カ月前に、あなたと話をした男です。
柿本　あの人なんですか？　でも、どうして？
サカモト　それは、僕にもわかりません。五時頃でしょうか、誰にも言わずに、姿を消したんです。
オオクボ　その少し前に、二人組の小学生が来たんですね？
サカモト　ヒジカタと話をしていたんです。
おばあちゃん　まさか……。
サカモト　（柿本に）そのうちの一人がクリコちゃんなんですよ。
サイゴウ　クリコちゃんて、柿本さんの娘さんの？
サカモト　おばあちゃんを引き取ってほしいって、談判に来たんですよ。
オオクボ　でも、どうして電力ターミナルなんかを。
サカモト　柿本さん、よく聞いてください。彼はアンドロイドなんです。
柿本　え？
サカモト　僕たちＦＲＳの職員は、全員アンドロイドなんです。
オオクボ　あなたがアンドロイド？　またまた。
サカモト　アンドロイドが狂うなんて、万に一つもありえないことです。しかし、もしそのありえないことが起こったとしたら……。

柿本　クリコは、クリコはどうなるんですか？
サカモト　柿本さん、クリコちゃんが何をしようとしているのか、心当たりはありませんか。
柿本　わかりません。東京を停電にして、あの子に何の得があるのか。
おばあちゃん　東京中が停電になったら、私のバッテリーは空っぽになるのよ。
スギエ　それじゃ、クリコはおばあちゃんを動けなくするために？
柿本　（正面に向かって）おばあちゃん、このテレビを見ていますか？　クリコを助けてください。あの子はきっと、自分が何をやっているのか、わからないんです。
スギエ　おばあちゃん。
カシオ　おばあちゃん。
柿本　おばあちゃん。
おばあちゃん　行きましょう。あの子の冬を終わらせるために。

クリコ・カツラ・ヒジカタが飛び出す。

クリコ　やったあ！　二つ目も大成功！
ヒジカタ　あれだけ壊せば、修理するのに一週間はかかるでしょう。
クリコ　それまでは、原始時代に逆戻りね。
ヒジカタ　原始時代はオーバーだな。電気が発明されたのは、江戸時代ですよ。
クリコ　ということは、東京は一週間だけ、江戸に戻るんだ。
カツラ　昔はこんなに暗かったの？
ヒジカタ　街灯もネオンサインもありませんでしたからね。
カツラ　何だか恐くない？　人が誰もいないみたいで。
クリコ　何言ってるのよ。あそこのビルは電気がついてるじゃない。ほら、あそこも。
ヒジカタ　たぶん、病院か消防署でしょう。公共の建物は、いざって言う時に、自家発電できるようになってるんです。
クリコ　手術の最中に電気が消えたら、大変なことになるもんね。
カツラ　でも、自家発電できない建物は？　みんな、困ってると思うよ。
クリコ　仕方ないわよ。おばあちゃんを壊すためには、東京中を停電にするしかないの。

カツラ　そうかな。私は、ＦＲＳだけ停電にすればよかったと思うけど。
ヒジカタ　いや、それだけではダメなんです。
カツラ　どうして？
ヒジカタ　アンドロイドの整備工場は、ＦＲＳの他にもたくさんあります。ＦＲＳが停電になっても、他の所へ行けば、すぐに充電できてしまう。
カツラ　だからって、東京中を真っ暗にするなんて。
クリコ　何よ。あんた、後悔してるの？
カツラ　そうじゃないけど、恐いのよ。街がどんどん死んでいくみたいで。
クリコ　恐いのがいやなら、家に帰って布団をかぶって寝れば。
カツラ　一人じゃ帰れないよ。
クリコ　だったら我慢しなさいよ。（ヒジカタに）次はどこへ行くの？
ヒジカタ　新宿です。（急に立ち止まって）いよいよ、次が最後です。さあ、車に乗って。
クリコ　どうしたの、ヒジカタさん？
ヒジカタ　ちょっと疲れたかな。まあ、気にしないで。（また動き出して）江戸時代まで、あと一歩です。

三人が走り去る。おばあちゃん・カシオが飛び出す。カシオの手には携帯電話。耳にはイヤホン。

カシオ　のんびり歩いてないで、走ろうよ。
おばあちゃん　慌てない慌てない。
カシオ　それで、僕たちどこへ行くの？

おばあちゃん　カシオくんはどこへ行けばいいと思う？
カシオ　東京の電気を全部止めるなら、他の電力ターミナルへ行くと思う。
おばあちゃん　他のはどこにあるの？
カシオ　新宿と両国。
おばあちゃん　それじゃ、とりあえず新宿へ行きましょう。
カシオ　とりあえず？　全く頼りないなあ。あれだけカッコつけて家を飛び出したのに。
おばあちゃん　ちょうどよかった。バスが来たわよ。
カシオ　バスで行くの？
おばあちゃん　電車はみんな止まってるんでしょう？
カシオ　アンドロイドなんだからさ、空を飛ぶとか、時速二〇〇キロで走るとかしてほしいよな。

二人がバスに乗る。

おばあちゃん　さっきから何を聞いてるの？
カシオ　ニュース・プラネット。
おばあちゃん　テレビの音も入るんだ。おばあちゃんにも聞かせてくれない？
カシオ　もう電池が切れかかってるんだよ。（携帯電話を渡す）
おばあちゃん　私の電気を使えば大丈夫よ。（イヤホンを外す）

二人が去る。柿本・サイゴウが現れる。

柿本　ただ今入りました情報によりますと、今から五分ほど前、正確には午後七時三〇分頃、東京東部一帯が停電になりました。

サイゴウ　まだ確認はできておりませんが、今度は両国の電力ターミナルが、送電機能を停止した模様です。

柿本　またクリコのやつがやったんでしょうか。テレビをご覧の皆さん、本当に申し訳ございません。

サイゴウ　停電になったご家庭は、ご覧になってないんですよ。

柿本　次に停電になるご家庭に、あらかじめお詫びを申し上げます。

サイゴウ　さて、今回の事件の主犯格であります、ＦＲＳ職員のヒジカタ容疑者ですが、彼はＦＲＳに来る前は、本郷の東大病院に勤めていたんですね。

柿本　先ほど、電話で東大病院に問い合わせてみたんですが、ヒジカタ容疑者は一年前から、老人科の看護人として熱心に仕事をしていたそうです。

サイゴウ　ところが、今年の三月、入院中の患者の一人が、急死してしまったんです。

クリコ・カツラ・ヒジカタが飛び出す。

カツラ　あの車、どうするの？

ヒジカタ　渋滞がひどくて、前に進まないんです。置いていくしかないでしょう。

カツラ　持ち主に返さなくていいの？

クリコ　悪いと思うんなら、あんたが返しに行きなさい。

ヒジカタ　あのバイクに乗りましょう。

カツラ　また勝手に借りちゃうの？

クリコ　鍵もないのに、よく動かせるわね。

ヒジカタ　こう見えても、機械には詳しいんですよ。さあ、バイクに乗って。

三人が去る。バイクが発進する音。

柿本　これは、心臓の手術をした夜に容体が急変したもので、ヒジカタ容疑者の当直中だったんですね。遺族はアンドロイドの看護にミスがあったのではないかとして、裁判所へ訴えたんです。

サイゴウ　その後の調べで、ヒジカタ容疑者には全くミスのなかったことが明らかになりました。しかし、ヒジカタ容疑者はこれを機に、ＦＲＳへ移動することになったんです。

柿本　これは、ヒジカタ容疑者本人の希望によるものでした。

サイゴウ　自分の看護してきた人間の死が、アンドロイドの心を狂わせたのでしょうか。

おばあちゃん・カシオが飛び出す。

カシオ　大事な電気を、ケータイなんかに使っちゃっていいの？

おばあちゃん　大丈夫大丈夫。いざとなったら、これで充電するから。

カシオ　髪の毛で？

おばあちゃん　アンドロイドの髪の毛は、全部太陽電池になってるの。バッテリーが切れると同時に、太陽電池が作動するのよ。

カシオ　ということは、光がなくならない限り、アンドロイドは不死身なんだ。

おばあちゃん　さあ、着いた。新宿よ。

二人が去る。バイクが停車する音。クリコ・カツラ・ヒジカタが飛び出す。

ヒジカタ　表から入ると目立ちますね。裏へ回りましょう。

クリコ　ここを壊せば、江戸時代の完成ね？

ヒジカタ　アンドロイドなんかいなかった時代です。

三人が走り去る。

柿本　ヒジカタ容疑者が次に襲撃するのは、東京西部一帯に電力を供給する、新宿ターミナルと思われます。

サイゴウ　レポーターのオオクボさんが、たった今、到着した模様です。オオクボさん。

オオクボが飛び出す。

オオクボ　はい、今度は遅れませんでした。このターミナルは、東京に残された、最後の一つとなってしまいました。ここが破壊されれば、東京二十三区は完全に真っ暗闇です。

柿本　クリコはまだ来ませんか？

オオクボ　人の姿はどこにもありません。私が一番乗りです。もしこの場に犯人が現れたら、ニュース・プラネットの独占です。スクープです。

柿本　他のマスコミはともかく、警察は何をしてるんだ。

サイゴウ　都内の交通は完全に麻痺していますからね。

オオクボ　あっ！

サイゴウ　アンドロイドが現れましたか？

オオクボ　現れました。アンドロイドのおばあちゃんが。

そこへ、おばあちゃん・カシオが飛び出す。

柿本　おばあちゃん！

オオクボ　おめでとう。二番と三番です。

おばあちゃん　クリコちゃんはまだですね？
カシオ　ここには裏口はないのかな？
オオクボ　ありますよ。でも、鍵がかかってるから、中には入れないでしょう。
サイゴウ　オオクボさん、中に誰かいるみたいですよ。
カシオ　あっ、クリコ！

そこへ、クリコ・カツラ・ヒジカタが飛び出す。

カシオ　やっぱり裏から入ったんだ！
オオクボ　まさに裏をかかれたわけですね！
カシオ　おばあちゃん！

おばあちゃんが扉を押す。ヒジカタが扉を押さえる。

ヒジカタ　エレベーターは？
クリコ　地下三階。
ヒジカタ　早く呼ぶんだ。
柿本　クリコ！　おまえは、自分が何をやっているのかわかってるのか？
サイゴウ　（クリコに）あなたのおかげで、何百万人もの人が困ってるのよ。
カシオ　（クリコに）おばあちゃんが死んでもいいのか？
クリコ　死ぬのは人間だけよ。アンドロイドは、動きが止まるだけ。
柿本　おばあちゃんは人間だ。
クリコ　違う。

柿本　どこが違うんだ。おばあちゃんは笑う。おばあちゃんは怒る。おばあちゃんはおまえのことを心配する。心配するのは人間だけだ。心配するのは、おまえが好きだからだ。

クリコ　私は好きじゃない。

柿本　どうして。

クリコ　決めたのよ。もう誰も好きにならないって。

エレベーターの扉が開く。

カツラ　来たよ。

ヒジカタ　先に乗って。

柿本　（クリコに）母さんが死んだからか。おまえの大好きだった母さんが。

クリコ・カツラ・ヒジカタがエレベーターに飛び乗る。おばあちゃんが駆け寄ると、扉が閉まる。

カシオ　上へ行ったよ。

オオクボ　三階に、このターミナルのコントロールセンターがあるんです。

おばあちゃん　階段は？

カシオ　あっちにある。

オオクボ　私も行きます。

おばあちゃん・カシオ・オオクボが走り去る。

サイゴウ　オオクボさんが三階に着くまで、コマーシャルをどうぞ。

柿本とサイゴウが去る。エレベーターの扉が開く。クリコ・カツラ・ヒジカタが飛び出す。

ヒジカタ　階段は？
カツラ　あっちにある。
ヒジカタ　シャッターを下ろしておけば、簡単には入って来られないでしょう。いくらアンドロイドでも。
クリコ　そう言えばさっき、アンドロイドに押されて、よく我慢できたね。
ヒジカタ　それは、僕もアンドロイドですから。
カツラ　ヒジカタさんて、アンドロイドなの？
クリコ　嘘よ。
ヒジカタ　別に隠していたわけじゃないんですよ。でも、人間だと思えば、人間に見えるでしょう？
カツラ　見える見える。言われなければ気がつかなかった。
クリコ　嘘よ。アンドロイドのわけない。
ヒジカタ　アンドロイドじゃなかったら、とっくに感電して死んでますよ。
クリコ　だったら、どうしてこんなことするの？　東京中を停電にしたら、あなたも一緒に壊れるのよ。
ヒジカタ　僕のことはどうでもいい。あなたはアンドロイドがイヤなんでしょう？
クリコ　私がイヤなのは、あの人だけよ。
ヒジカタ　だったら、壊すしかないんだ。危なくなったら、呼んでください。

ヒジカタが走り去る。そこへ、おばあちゃん・カシオ・オオクボが飛び出す。

オオクボ　なんと、シャッターが下りています。
おばあちゃん　力仕事なら、任せなさい。（シャッターをつかむ）
カシオ　クリコ、そっちにいるのか？
カツラ　クリコちゃん、呼んでるよ。
カシオ　（クリコに）おまえはおばあちゃんと話をしてないだろう？　話もしないで、どうしてイヤがるんだ。話をすれば、アンドロイドだなんて思えなくなるんだぞ。
クリコ　アンドロイドだって、人間だってイヤなの。おばあちゃんなんかいらないの。
おばあちゃん　だったら、せめて、お友達にでもしてくれないかな。
カツラ　ヒジカタさん、シャッターが上がってきた。

ヒジカタが飛び出す。

ヒジカタ　よし、これで東京は真っ暗になった。
カシオ　嘘つけ。こんなに明るいじゃないか。
ヒジカタ　この建物は自家発電に切り替わったんだ。（クリコに）発電機は屋上です。さあ、エレベーターに乗って。
オオクボ　今度は屋上ですか？
カシオ　（ヒジカタに）まさか、発電機まで壊すつもりか？

ヒジカタ　光がなくならない限り、おばあちゃんは壊れない。（クリコに）さあ。

おばあちゃんがシャッターを押し上げる。クリコ・カツラ・ヒジカタがエレベーターに飛び乗る。カシオが駆け寄ると、扉が閉まる。

おばあちゃん　（急に立ち止まって）クリコちゃん……。

カシオ　もう電気がないの？

おばあちゃん　太陽電池に切り替えたんだけど、間に合わないみたい。

カシオ　大丈夫？

おばあちゃん　（また動き出して）うん。

オオクボ　また階段を上がるんですね？

カシオ　イヤなら、ついて来なくていいよ。

オオクボ　でも、このビルは二十階建てですよ。屋上へは、まだ十七階もあるんですよ。

おばあちゃん・カシオ・オオクボが走り去る。エレベーターの扉が開く。クリコ・カツラ・ヒジカタが飛び出す。

カツラ　わあ、本当に東京が真っ暗だ。

ヒジカタ　（発電機を指さして）こいつを壊せば、おばあちゃんも壊れますよ。

クリコ　あなたも一緒に壊れるじゃない。

ヒジカタ　仕方ないでしょう。僕もアンドロイドなんだから。

クリコ　それじゃ、自殺よ。

ヒジカタ　アンドロイドに自殺はできません。しかし、人間のためにすることが、結果的に自分を殺すことになったら、それはそれで仕方ないことなんです。

そこへ、おばあちゃんが飛び出す。

おばあちゃん　あんたの患者さんが死んだから？

カツラ　信じられない。どうしてこんなに早く来られたの？

おばあちゃん　（ヒジカタに）それはあんたのミスじゃなかったんでしょう？

ヒジカタ　僕には何もできなかった。二十四時間看護しても、話をして仲良くなっても、アンドロイドはアンドロイドなんです。アンドロイドは死なないから、死んでいく人間の悲しみはわからない。アンドロイドに人間は救えません。

おばあちゃん　でも、人間のためにできるだけのことをするのが、アンドロイドの仕事のはずよ。

ヒジカタ　本当に人間が救えるのは、人間だけなんです。人間に必要なのは、人間だけなんです。

おばあちゃん　だから、アンドロイドはいらない？

ヒジカタ　（クリコを示して）この子だって、そう言ってるじゃないですか。

クリコ　アンドロイドだって人間だって同じよ。お母さん以外はいらないの。

ヒジカタ　そうです。人間は、自分一人の力で生きていくしかないんです。死ぬ時はたった一人なんだから。

おばあちゃん　一人で生きてる人間がどこにいるの。

ヒジカタが発電機を叩く。凄まじい爆発音。一瞬で闇に。

クリコ　おばあちゃん？

おばあちゃんの動きが止まる。倒れる。

クリコ　おばあちゃん！　おばあちゃん！

クリコがおばあちゃんに駆け寄る。

おばあちゃん　……アンドロイドだって、いつかは壊れる。動かなくなる。死ぬ。だから、私を嫌っていたのね？　好きになって、もし私が死んだら、またお母さんの時のように、悲しい思いをしなければならなくなる。だから、私が壊れる前に、自分の手で壊そうとしたのね？　東京が真っ暗になれば、私は死ぬ。光がなくなれば、太陽電池さえ役に立たない。でもね、地上の光をすべて消しても、空の光は消せないの。東京だって、こんなに暗くなれば、こんなに星が見えるじゃない。星の光がこんなにあれば、私は死なない。私は決して死なないの。クリコちゃんを一人にはしない。ごらんなさいよ。広くてすてきな宇宙じゃない。

クリコ　……おばあちゃん！

カシオがやってくる。

カシオ　こうして春がやってきた。クリコのしでかした事件は、日本中で大評判になったけど、主犯はヒジカタというアンドロイド。アンドロイドを作ったのは政府だから、停電の時に起きた被害は、全部政府が弁償してくれた。とは言え、クリコだって、父さんからこっぴどく叱られた。子供を叩くのは親の仕事だ。そして、お尻に絆創膏を貼るのは、おばあちゃんの仕事だった。あれから四年。四年なんてあっという間だ。思い出を数え出したら、きりがない。もちろん、その一つ一つの中に、いつも必ずおばあちゃんがいた。おばあちゃんがいるから、何でもできた。おばあちゃんがいるから、どこへでも行けた。家に帰れば、いつも必ず、おばあちゃんがいた。

そこへ、柿本がやってくる。

柿本　カシオ、いつまで待たせるんだ。おばあちゃんは怒らなくても、父さんは怒るぞ。

カシオ　今、行く。

柿本　スギエとクリコはどうした。

カシオ　お別れのプレゼントを取りに行った。
柿本　なぜ昨日言ってくれないんだ。父さん何も用意してないよ。
カシオ　今、思いついたんだよ。さあ、行こう。

カシオ・柿本が去る。スギエ・クリコがやってくる。

スギエ　あれ？　おばあちゃんは？

そこへ、おばあちゃんがやってくる。

おばあちゃん　あんまり待たせるから、夕食の支度をしちゃったわよ。
スギエ　ごめん。この前習った煮物を作ろうと思ってたのに。
クリコ　おばあちゃん、これ。（紙袋を差し出す）
おばあちゃん　私にくれるの？
クリコ　何にも用意する暇がなかったから。
スギエ　（おはあちゃんに）私も。（紙袋を差し出す）
おばあちゃん　こんな物をもらわなくても、あんたたちのことは忘れないわよ。
クリコ　でも、もらってほしいのよ。

カシオ・柿本がやってくる。

カシオ　僕もこれ。（紙袋を差し出す）
おばあちゃん　ありがとう。次の家で飾らせてもらうわ。

柿本　すみません。僕は何にも用意してなくて。
おばあちゃん　お父さんには四年前にもらいましたよ。
柿本　え？
おばあちゃん　この子たちに会わせてくれたじゃないですか。
クリコ　……もう会えないの？
おばあちゃん　会えるわよ。毎月十日はＦＲＳに充電に行くから、ＦＲＳにいらっしゃい。
クリコ　私がおばあちゃんを必要になったら、また来てくれる？
おばあちゃん　高校生にもなって、おばあちゃんが必要じゃ、困るわね。
クリコ　私が歳をとって、おばあちゃんになって、また一人ぼっちになったら？
おばあちゃん　子供じゃないとダメなの？
クリコ　クリコちゃんがもし本当に必要になったら、いつでも飛んでくるわよ。
おばあちゃん　約束ね？
カシオ　（うなずく）
おばあちゃん　……おばあちゃんはアルコルなんだね。
カシオ　アルコル？
おばあちゃん　いつでもミザールと一緒にいて、でも、知らない人が見ると、ミザールだけが光ってるように見える。
おばあちゃん　ミザールがなかったら、アルコルなんて小さな光よ。

おばあちゃんが去る。四人が見送る。やがて、柿本・スギエが去る。

カシオ　ここからは未来の話になる。未来と言っても、ほんの六十年先の時代だ。しかし、人間にとっては充分な長さだ。クリコは結婚し、子供を産み、子

供を育て、その子供も結婚し、孫を産む。クリコと夫は歳をとり、夫はやがて亡くなり、クリコは一人ぼっちになる。子供や孫はたまに会いに来るが、クリコは一人で生きていくしかない。そんなある日、六十年前の約束をふと思い出す。必要になったら、いつでも飛んでくると言った、あの人のことを。電話のボタンを押す指が震える。

クリコ　もしもし、もしもし。

別の場所に、ヒジカタが現れる。

ヒジカタ　はい、ＦＲＳです。

クリコ　私のおばあちゃんに会わせてください。約束したんです、六十年前に。必要になったら、いつでも飛んでくるって。

ヒジカタ　あなたにとって、本当に必要なら。

クリコ　必要です。私には、おばあちゃんが必要です。

ヒジカタ　わかりました。

ヒジカタが去る。

カシオ　そして、おばあちゃんはやってくる。日傘を差して、トランクを持って。六十四年前と同じように、あのチャイムを鳴らす。

チャイムの音。

クリコ　　どうぞ。

扉が開く。おばあちゃんが立っている。

クリコ　　覚えてる、私のこと？

おばあちゃん　　覚えてるわよ。クリコちゃんが言ったこと。したこと。一緒に暮らした四年間のことは、全部覚えてる。

クリコ　　それなら、教えて。どうしてあんなに早く来られたの？　あのビルは二十階建てだったのに。エレベーターは、私たちが使ってたのに

おばあちゃん　　おばあちゃんは何でもできるのよ。クリコちゃんのためなら。

クリコ　　でも、どうして？

おばあちゃんが笑う。そして、空へと舞い上がる。見上げるクリコ。夜空は星でいっぱいだ。

＜幕＞